

とく
徳

ほう
朋

自分だけはわからせてもらった

亀井 鑛^{ひろし}



かめい ひろし

1929-2021

愛知県出身。名古屋市内でタバコ店を営み、若い頃より熱心に聴聞する。NHK「こころの時代」司会者としても活躍する。

(タバコ店を開業した当時) 一人の従業員が、何時になっても顔を出さない。どうやら無断欠勤のようです。その日一日の仕事はそれぞれ手持ち一ぱいあるんですが、それも棚上げして休んだ彼の持ち分を肩替わりして私が背負わねばなりません。以前から家族間の人間関係がこじれて問題を抱えていることは判っていたんですが、いざこの場の状況に直面すると、先立つのは腹が立つ。今後の事も案じられ、憤懣^{ふんまん}が納まりません。内心すこぶる穏^{おだ}やかならざる思いのまま、彼の担当の得意先を巡回^{じゆんかい}しはじめます。～中略～(その後、無断欠勤した従業員の得意先での商談がうまくいき) その頃には、いつしか無断欠勤した従業員を対抗的に構える気分から解放されている私でした。「商売ってのも、いいもんだ」といった、充足感、融和感、ルンルン気分がくるりたっています。

朝の出かけのあのこわばり。

何か自分にとって不都合が起きると、反射的に自己第一の利害打算に立って、相手ばかりをやり玉にあげて、一喜一憂しています。この私の胸板の裏にひそむ計量メーター。目に見えない針が、いつも損か得か、勝ちか負けか、善か悪かと、左右へピクピクと行ったり来たりして、計算をめぐらしています。

仏法ちようもん聴聞六十年、九十歳を過ぎた今現在にいたっても、それは頑強に、敏活に寸分の狂いもなく反応しつづけてやみません。六十年の聞法生活、一体何を聞いてきたのだ。何が分かったのだと自ら問うてみます。日夜自分にこだわり、自分にかたより、自分第一にとられるこの自分自身がわかるなら、道は明るく、ひとりでに開かれます。

最晩年の金子大榮さんがご生前に、「九十歳過ぎた今日、仏法から何が分かったかと問われるなら、何一つわかったと言えるものはありません。そうとしかいえない。ただ、自分だけは分かせてもらった、それだけでしょう。それで十分ですと私は言いたい」と述懐じゆっかいをされた、と覚えています。

仏教につつまわるウソっぽさへの反発と不信。とりわけ若く健康な現代人は敏感です。それで済むわけではないけど、その理知的偏向を超え破った域に仏教、法界はあるのだから、ウソっぽさをかいくぐって、共有同感しあうのが、今日の課題です。



(『生きるとは何か』)

私たちの苦しみの根源には上記のような「日夜自分にこだわり、自分にかたより、自分第一にとられるこの自分自身」があります。この自分というものを教えて下さるのが、仏教聴聞です。ここが分かれば「道は明るく、ひとりでに開かれます」。とても大事な示唆しさだと思えます。(哲弘 拝)



この「徳用」とくほうは仏教を拠り所よとしている方々の言葉に直じかに触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。